「神が創造された尊い存在の人間と被造物」

創世記１：１－２

堀田修一　２４・１・７

今年の「初め」の主日礼拝で、聖書の最初のみことばを味わえることは意義深い事です。
Ⅰ「はじめに神が天と地を創造された」：１
このみことばは、神の創造の御業の全体を要約する重要なみことば。それゆえ、このみことばは、私たちに多くの事を語っています。

１．「はじめに」。人間の側から観察した「初め」。私たちの祝福のための「初め」。神は、この「初め」の前から存在されていた。御子なるキリストも御霊も父なる神とともに、永遠の初めから存在されていました。ヨハネ１：１，２で「初め（永遠の初め）にことば（神であり主イエス）があった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた（御父と御子イエスは愛し合う交わりを持っておられた）」と語られています。主イエスは、世界が創造される以前から、父なる神とともにおられ、父なる神とともに交わっておられました。天の軍勢が主の栄光を讃えていた。

２．ヨハネ１７：２４には「あなたがわたしを世の始まる前から愛しておられた」とある。永遠の初めから父なる神と子なる神と聖霊なる神との愛の交わりがあり、人類の歴史の始まる以前にすでに神がご自身の意思を働かせておられたのです。三位一体の神の愛の交わりがあり、その愛の御性質は初めから一貫しておられたのです。

３．しかも驚くべきことにエペソ１：４で「すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前から彼（主イエス）にあって選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました」と語られています。神は、私たちのことを初めからご存知で、創世記１：１の「初め」の以前に、私たちを救いに選ばれて、私たちをご計画のうちに取り込まれ、祝福の対象とみなし、神の前に聖い者とし、神に受け入れられる「傷のない者」にしようとされた。人知をはるかに超えた驚くべき恵みです！

４．「はじめに神が天と地を創造された」。神、この世界を、紛れもない、栄光に満ちた尊厳ある神が創造されました。ここで用いられる神の名は、原語で「エロヒーム」という普通名詞。この名詞は、複数形。尊厳，威光を示す複数形。これは、多神教を意味していない。不思議なことに、「創造された」は、単数形。ここから、父、子、聖霊なる神、三位一体の神（複数形）の創造（単数形）を確信させられる。偶然に世界が存在したのでも偶然に生物が存在するようになったのではない。尊厳と威光に満ち、私たちのことを生まれる前から知っておられる三位一体の神が、ご自身の深いご計画と深い愛によって、この世界、宇宙を神の英知を尽くして創造されたのです。

５．栄光と尊厳に満ちた神が、責任をもって、天と地、私たちを存在させられた。そうであれば、私たちの個人的な生活や私たちの存在をめぐって、そこに絶望は全くない。そこには神の計り知れない英知と御計画があります。その神に造られた私たちの存在には特別な意味があります。今の時代、多くの人が自分の存在の意味をめぐって悩み、希望を失っています。働いても、意味を

見出せない。社会の歯車にはめ込まれ、どこに真の生きる意味があるのかと、魂が必至の叫びを上げています。仕事をする人も、家庭を守る人も、学ぶ学生も、仕事から離れている人も、病床に伏している人も、それぞれに、神に大切に創造された魂を持つ尊い存在であるがゆえに、存在自体に重要な意味がある。「神が天と地を創造された」というみことばは、私たちの存在の重大な理由となっています。神が深いご計画のうちに、私たちを特別の意図をもって創造され、この世界に大切な目的をもって、重要な使命を果たさせるために、この世界に置かれたのです。あなたや私が置かれている場は、私たちの思いを超えて、実は神の特別のご目的が果たされる場であり、それは初めから主によって定められている意味ある場です。私たちの存在自体が、神の意思の表れとして尊いのです。今、神が私たちを置かれている場で、神と人に仕えましょう。※証し。

6．神が私たちを創造されたということは、そこに熟慮に基づいた神の特別の御計画があり、どういう経験をし、どういう人と出会い、どういう交わりに加えられ、どういう働きをするかも、すべては神の特別なご配剤の中にあるのです。このように物事を捉えると、一つ一つに意味を感じ嬉しくなりますね。与えられる使命を責任をもってやり遂げることも、時にはつらい戦いの中に置かれることも、悲しみや痛みの経験も、自分の働きが遅延されるもどかしさを感じることも、すべてがあなたを造られた創造者の御手の中にあることであり、それは実に尊い経験でもあります。今年、この恵みの中で歩みましょう！

Ⅱ「地は茫漠として何もなく、闇が大水の面の上にあり、神の霊がその水の面を動いていた」：２。

1．「茫漠」は、「混沌、カオス」という意味ではなく、作物も取れない「生産不可能な土地」という意味であることが分かって来ました。「その地は私たちにとって、生きられる場所ではなかった」ということです。その場所は神の創造以前の状態であり、私たちが生きるに適した所ではなく、やがて「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従わせよ」（１：２８）との繁栄の祝福を受けるために必要な一切がない状態だったという意味です。絶望的で危機的な状況がそこにあり、果てしなく広がっていた。まさに「茫漠として、何もなかった」のです。しかも、「闇が大水の面の上にあり」とあります。聖書では、「闇」も「大水」も災いをもたらすものです。何も見えず、希望がありません。徹底的に絶望的な状態を示しています。

2．ところが、この闇の中で、「神の霊がその水の面を動いていた」と希望のみことばがあります。「光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった」（ヨハネ１：５）のみことばが響いてきます。創世記１：２の「神の霊」とは「神の風」「神の息」とも訳すことが出来る言葉です。神であるご聖霊です。聖霊なる神が、この絶望的な闇の中で、しかも恐るべき「大水」の上に臨在され、御業を行おうとしておられたのです。神は、全被造物と人間を絶望的な状態の中から大切な存在として創造されました。感謝！

3．父、子、聖霊の三位一体の神にとって不可能なことはないのです。しかも、神が臨在されない場所はないのです。全能の神は、この死の匂いのする「大水」の面におられ、闇の中にも住まわれるのです。その時に、闇の中に光、希望が生まれます。今年も、色々な事で絶望しそうな時に、その出来事の中で神に祈りましょう。神は希望の光を与えられます。２節の暗闇の中に、死の現実の面に神の臨在があり、神の霊、御聖霊がいのちをもって、御自身のみこころを実行に移そうとしておられたのです。神の霊がその水の面を「動いていた」の原語は、「舞いかける」と訳されることもあります。この原語は、「鳥が滑空するときに用いられる」言葉であり、同時にすべてを支配し、制御し、見守っておられるという意味を持っています。この原語は、申命記３２：

１１で「鷲がその巣のひなを呼び覚まし、そのひなの上を舞い、翼を広げてこれを取り、羽に乗せて行くように」の中のそのひなの上を「舞い」です。「舞い」とは、呼び覚まし、羽に乗せるまでの動作、つまり、羽ばたいたり、舞いかけて支度をするウォーミング・アップの動作を示すのでしょう。全能の神、命の息を吹き込む聖霊なる神は、創造の準備を入念にされた。※証し

４．全能の神にとって、茫漠として何もない地は問題ではないのです。闇も大水も何の障害にもならないのです。今年、神の御手にある私たちに何が起ころうとも。神は静かにそこに臨み、すべてを支配し、最善の時を見計らっておられます。神の力強い御手と、いのちの息が、あらかじめ私たちのために、私たちを愛し、私たちを選び、私たちを祝福されるために備えられていたのです。この世界が偶然によったのではなく、慈愛に満ちた三位一体の神の英知によって造られた御業を賛美しましょう。今年の私たちの歩みも偶然な事はなく、神の力強い御手と摂理、御支配、御計画の中にあることを喜び祈り続けましょう！